



取材・文・写真：浅井 友弘

屋上から考える環境

たたみ畳分の畑から出来ること

都会のある場所で・・・

街を歩いていて、ビルの合間から顔を覗かせる公園の緑や並木道の緑を見ると少しホッとします。無機質なビルの堅い感じとは違った、穏やかなイメージを与えてくれるからだ。しかし、緑のために新しい土地を確保することが難しいためか、都会の中で気に留めるほどの緑を発見することは少ない。そんな中、近年注目されている場所がある。屋上だ。ヒートアイランド現象の影響もあり、しばしば緑化の対象とされる場所なのだが、普段、街行く人には滅多に見られることのない場所でもある。

そこで、ふと思うことがある。もし、東京タワーの展望台から見える建物の屋上が緑に覆われていたら・・・きっと、心が和むだろう。そんな東京の屋上で、一味違った屋上緑化、いや、人の心を緑化してくれるような活動に出会った。その名を「たたみ畳農園」。ハンド・イン・ハンドという活動の一環だ。

◇ハンド・イン・ハンドとは◇

子供達を取り巻く環境が極端に人工化されてしまっている現代、子供達が自然に触れ合う機会は少なくなっているといえる。社会が、大人達が取りあげてしまった自然。その自然を子供達に取り戻してあげることが、大人達にとって重要なことではないだろうか。このような考えの下、NPO プラント・ア・ツリー・プラント・ラブによって始められたのがハンド・イン・ハンドという活動だ。ハンド・イン・ハンドとは、アジアの子供達の秋の植樹祭のことで、愛・地球博の最終日である2005年9月25日を活動の出発日としている。愛・地球博が終わっても、そこで行われてきた植樹祭という活動は継続してゆこうという考えであり、毎年9月25日を植樹祭の日とし、アジアの子供達が一齐に木を植えたり、花の種を撒いたりする。

植樹というと山に行き木を植えることを考えるかもしれない。しかし、この活動には、子供達、特に都会で暮らす子供達が、自分の身近なところで、自然

に五感で触れ合える場をつくらうという思いがある。より身近なところで触れ合うことにより、育てるということを知り、成長の観察も出来るということが特徴だ。植えたらそのまま、管理は大人がするという植樹とは違っている。

◇子供達の可能性◇

ハンド・イン・ハンドの主役は子供達である。21世紀は自然を考える世紀にしたいとNPO プラント・ア・ツリー・プラント・ラブは考えている。しかし、現実には経済優先という傾向があり、自然の大切さを十分にわかっていても、競争社会の中では目先の事への没頭を余儀なくされている。土地利用のためならば森も林も切り開く。そこには人の価値観というものが絡んできているのだが、大人の価値観を変えるのはなかなか難しいことだ。そんな中、ハンド・イン・ハンドの活動には、子供達に自然と触れ合ってもらい、命の体験をしてもらいたいという思いが含まれている。どんなに小さくてもいい、自然を大切に、命を



目黒駅 駅ビル atrium

大切にしてほしいと願う気持ちがそこにはある。そのような子供を育てることがこの活動の目的であり、子供達だけでは難しい時に大人達がサポートするという形をとっている。

◇屋上での農園の姿◇

都市に住む子供達は自然を五感で感じる機会が少ない。そこで、注目されたのが屋上という場所だ。ハンド・イン・ハンドの活動の一つに、JR目黒駅アトレ1の屋上にて行われている「たたみ一畳農園」というものがある。これは、プラント・ア・ツリー・プラント・ラブ側の提案をアトレ側が受け入れることによって実現したもので、大きさがたたみ一畳分の箱型の畑が屋上に配置されている。初めは、4基から始まり、今では14基となっている。

しかし、たたみ一畳分の大きさだからといって侮ってはいけない。この大きさだからこそ可能なことがある。それは移動だ。商業施設の屋上という性質上、様々な用途が考えられ、物を固定して置くということが難しい。そこで、各畑の箱の下にキャスターを付けて、容易に移



動できるようにしたわけだ。ビルの屋上ならではの工夫が光っている。また、この大きさは、子供達が野菜や花の世話をするのにちょうどいい大きさという利点もある。「たたみ一畳農園」は、屋上農園のひとつの姿であり、その小さな畑からでも子供達は自然を感じることが出来るのだ。

◇野菜から昆虫へ◇

「たたみ一畳農園」では、子供達が種を撒き、苗を植えて野菜を育てている。収穫の時、子供達は自分で育てたラディッシュを得意げに幼稚園に持っていき友達に分けたり、野菜が嫌いだっ子が自分で育てた大根の葉はおいしそうに食べたりするという。大人達にとっては、なんとも微笑ましい光景だろう。

また、アオムシがキャベツについているのに気づいた子供は、大人達がキャベツの見た目が悪くなることを気にする横で、アオムシ観察中の札を立てて喋々になるまで観察し、見た目が悪くなった野菜について大人達が収穫を提案すると、トノサマバッタが住んでいるからそのままにしておきたいと頼んでくると



いう。その他にも、テントウムシの観察、カブトムシの幼虫の飼育など、野菜を育てることと並行して昆虫という命を感じているのだ。

都会の屋上で、土をいじり、種から野菜が育つことを知り、キュウリやナスの花を見て収穫を味わう。そして、不意にその畑を住処とした昆虫に出会い、観察しながら学ぶ。一つの畑から感じることはたくさんあるのだ。また、この活動の面白さは、サポートする側である大人達が、逆に子供達から学べる点にもある。

◇大人も驚く都会の農園◇

「子供達には驚かされる」と、プラント・ア・ツリー・プラント・ラブ理事のすとうあさえさんは語った。それは枝豆の収穫時のことである。子供達は枝豆の状態では収穫せずにおいたら、それが大豆になったことを大人達に伝えたのだという。スーパーに行けばほとんどのものが手に入る世の中で、実際にはどのようにしてできているかわからないものが多い。都会において、野菜などの食物は消費する一方であり、人々の中で生産過程というものはすっばりと抜け落ち





てしまっているのだ。このようなことを学ぶ機会は大人にとっても少ないものであり、それを子供達によって気づかされることに大人達は驚くのだ。

◇ビル側からの視点◇

本来、商業施設の屋上は駐車場や遊園地、時にはビアガーデンなどがよいと考えられる。屋上に人を呼ぶことによってシャワー効果が期待できるからだ。シャワー効果とは、一度上層階まで人を誘導し、帰り際に途中の階で買い物をしてもらうというものだ。

しかし、「ビル側としては、屋上に大きなお金をかけることはできない。また、屋上は避難スペースとしても使われるので、大きな改造もできない」と、アトレ目黒店営業課長の小萩さんと佐藤さん。そこで、容易に移動が可能で、人も呼び込める「たたみ一畳農園」の活動に協力したのである。ビル側からは屋上スペースや水を無料で提供しているが、その代わりに生き物と触れ合える場や、子供連れの家族がお弁当を食べながらくつろげる場を演出できている。そこには、物を売る側と買う側という関係とは



違った、ビル側と近隣地域の関係も築けるのではという考えがある。こういった活動に協力することは、ビル側にとって地域と共存するための重要な試みの一つなのだという。

◇ハンド・イン・ハンドの今後◇

「たたみ一畳農園は、100畳、1000畳と増やしていきたい。施設の屋上でこのような試みをするのは面白いことなのだけれども、難しい点もある」と、すとうさん。商業施設ならまだよいが、オフィスビルともなると不特定の人が入り出すことになり、了解を得るのが難しいのだ。しかし、目黒駅アトレ1のような事例もあり、出来るということは発信したいという。

経済が優先される中で、今ある人々の気持ちを変えることは難しく、このような活動は時間のかかる草の根活動だ。しかし、子供という果てのない小宇宙を膨張させていく機会を提供している。そして、自然という名の友達と一緒に進んできた子供達は、自然の恵みを無意識のうちに感じ、地球に優しい人になってくれるはずだ。そういう子供をこれからも



育てることがハンド・イン・ハンドの進む道である。「環境問題といっても、根本は人間の問題なのだ。人が何を大切に、何を切り捨て生きていくのか。それは価値観の問題であり、生き方の問題なのだ。人が変わらなければ、地球はますます壊れていく」と、最後にすとうさんは語った。

◇取材後記◇

ハンド・イン・ハンドという活動を、地上に広めていくことが困難であったとしても、屋上には可能性がある。緑と触れ合う機会が少ない都会には、都会なりの触れ合い方があり、「たたみ一畳農園」という小さな畑からでも自然を感じることが出来るのだ。

しかし、屋上という場所柄、多くの人には目にする機会がないだろう。そこで、このような活動は発信することが大切だ。少しでも興味を持って頂けたら、ハンド・イン・ハンドという活動の輪に加わってほしいと思う。

●ハンド・イン・ハンドの活動●

www.plantatree.gr.jp

